

NEWSLETTER #102

地区例会報告

p. 1 2014 年第 3 回関西地区例会報告……………堤万里子

書評

p. 3 東谷護編『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』……………高橋聡太

information

p. 4 会員の OUTPUT

p. 5 事務局より

2014 年第 3 回関西地区例会報告

堤万里子

南田勝也著『オルタナティブロックの社会学』書評会

日時:2014 年 7 月 19 日(日)17:00-20:00

於:関西学院大学 大阪梅田キャンパス 1403 号室

7 月 19 日、南田勝也氏の著書『オルタナティブロックの社会学』(花伝社、2014)の書評会が、関西学院大学大阪梅田キャンパスにて開催された。

同著『ロックミュージックの社会学』(以下ロックの社会学)が刊行されてからはや 10 年、待望の続編ということもあり、多くの参加者が集まった。

まず、評者の安田昌弘氏から四つの点について批評が行われた。一つは、英米と日本の 90 年代以降のオルタナティブロックの概観。『ロックの社会学』においてブルデュー理論を踏まえた上で形成されたアート、アウトサイド、エンタテイメントの三角形。それが 90 年代以降どのように変わってきたのかを英米と日本で比べておさえている。そこで、日本に関して 80 年代後半から 90 年代前半にかけてのバンドブームから J ポップに至るまでの間でその三角形がどういう位置づけになっているのか南田氏に説明を求めた。

もう一つは、サウンド面からの分析。本著作は『ロックの社会学』では見られなかった独自の分析であると高く評価した。それは、オルタナティブロックのサウンド面での特徴を示し、ギターが中心であること。黒人性を含んでいるか否かがロックとオルタナティブロックとを分ける一つの境界線になりうるとしていること。さらにインターネット技術によって、サイバークスケード現象が起こり、それがオルタナティブロックのサウンド作りの中に反映されていることの三点である。特にインターネットという機能は色々な選択肢と横並びにする効果がある。つまり一並びに並んだ古い音楽と新しい音楽をワンクリックで聴くことができってしまうということに注目した。三つ目は、身体性、精神性の音楽。ジェイソン・トインビーの示すポピュラー音楽の歴史において、ロックは特殊な時代であって、ダンスに戻ったという言い方をするのだが、それに対し南田氏は身体性の音楽が精神性の音楽になって身体性の音楽に変わっていったのだと主張している。そのことに関しては、なぜダンスではなく、スポーツに至ったのかその狙いを尋ねるものであった。四つ目は、00 年代の音楽を媒介する技術からの分析。媒介技術の拡散によってムーブメントを作ることが難しくなっていることに注目した。さらに、女性の不在とオルタナティブロックというくくりで聴か

れている音楽は本当にロックなのかという点について指摘された。

次に、評者の増田聡氏は安田氏からの「なぜダンスではなくスポーツなのか」という指摘に応答するように、ロックが「芸術からスポーツへ変化した」というところに力点をおきオルタナティブロックファンとしての自身の経験を交えながら批評された。増田氏は「芸術からスポーツへ変化した」ということは、ロックが「芸術の資格を失いスポーツの資格を獲得した」ということではなく、「芸術をモデルとして見るとよくわからないが、スポーツをモデルとしてみるとよくわかる」という存在になり、モデルが変わったと解釈した。主に三つの点から論じられた。まず、スポーツの快楽とロックの快楽。スポーツというのは、身体性と競争性が本質におかれている。南田氏のロックとスポーツとの類似性を示す焦点は片方のファクターである身体性であると指摘した。快楽という点から考えてみると、身体運動の快楽は、例えばスケートボーディングなどで感じる身体感覚を変容させて陶酔させるようなサイケデリックな快楽であるとしている。それがオルタナティブロックとスポーツに共通する美学ではないかと増田氏は強調した。次に聴取論の視点からみても。南田氏は昔のロック＝芸術／今のロック＝スポーツという図式を強調するが、それは本質的な違いというよりも程度の問題であって、現時点から過去のロックを見ていることからくる感じ方ではないかと指摘した。最後に蓮實重彦の示すスポーツと南田氏のスポーツとが通底すること提示した。蓮實重彦の示すスポーツの本質は身体の思いがけない躍動の現出であり、競争性は身体性を躍動させるための枠組みにすぎず二次的なものとされている。そういう意味でも、競争性が後景に退いたかたちの快楽、思いがけない身体性の躍動に立ち会う観客という構造みたいなものが共通している。抽象的な構造としては、スポーツとオルタナティブロックは身体の躍動に焦点があたる点で等しいが、スポーツが競争性の媒介によって観客を身体の躍動に立ち合わせ、その身体の躍動の渦に巻き込むのに対して、オルタナティブロックは競争性とは異なる媒介をもちいて観客を立ち合わせると結論づけた。さらにオルタナティブロックが「商品

として売られるスポーツ」になるとしたら、資本主義や政治体制へのアイロニカルな視線というロックの持ってきたイデオロギーはどのような変容を被るのかという問題提議がなされた。

最後に、安田氏と増田氏の指摘に対する南田氏の応答がなされた。南田氏は、まずトインビーを乗り越えたかったと述べ、クラブミュージックが出てきてロックは古くなったというところからロックを奪還したかったと主張した。ダンスとスポーツに関する指摘には、増田氏の解説を支持した。ダンスというのは一つの芸術的な表現であるため、ロックとの違いや類似しているものを説明できないためスポーツと示したと付け加えた。次に女性の不在について、オルタナティブロックとオルタナティブミュージックとの違いを盾に、今後、ロックがジェンダーの視点から研究されることを望んだ。最後に、90年代を境にサウンド面、テクノロジー面、環境面で旧来のロックを聴く環境が全く変わってきたことにふれた。90年代以降にロックファンになった人たちが世代的な軋轢の中で、60年代70年代のロックを聞いていた人たちが専有していたロックの言説を覆し、90年代以降に青年期を過ごした人たちに、言葉を与えなかったと主張した。

フロアからは、ライブが盛んに注目される中で、今後パッケージにおける表現は成り立つのかどうか。スポーツとして捉えるならば、ディシプリンの意味はどのように考えるべきか。ポップの状況を考えた時、オルタナティブロックをどう捉えるか。60年代にもサーフィンやバイクに乗るライディングが出ていたので、やはり程度と質の問題として捉えていきたいという質問やコメントがなされた。司会者の永井純一氏より本著作は問題提起的な意味があり、今日の書評会で活発に議論されブラッシュアップされ、前作同様、長く参照される本になるであろうと締めくくられた。

(堤万里子：立命館大学大学院)

書評

高橋聡太

東谷護編『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』 せりか書房、2014年

本書は日本のポピュラー音楽を対象とする歴史的研究を収めた論考集である。東谷護氏の編著書としては、2003年の『ポピュラー音楽へのまなざし——売る・読む・楽しむ』（勁草書房）、および2008年の『拡散する音楽文化をどう捉えるか』（勁草書房）に連なる三冊目の成果だ。ポピュラー音楽を主に同時代的側面から論じた前二者に対し、本書に所収された論考は比較的古い事例に焦点を絞っている。以下にその目次を引く。

第1章 エドガー・W・ポーブ「日本のポピュラー音楽にあわられる『中国』——明清楽の変遷を手がかりとして」

第2章 輪島裕介『『カタコト歌謡』から近代日本大衆音楽史を再考する』

第3章 遠藤薫「〈盆踊り〉とYOSAKOIの間に—グローバル／ナショナル／ローカルのせめぎ合う場としての現代祝祭」

第4章 周東美材『『未熟さ』の系譜——日本のポピュラー音楽と一九二〇年代の社会変動』

第5章 永原宣「『東京行進曲』から探る『アンクール』な日本の再発見」

第6章 安田昌弘「文化のグローバル化と実践の空間性について—京都ブルースを事例に」

第7章 東谷護「ポピュラー音楽にみる『プロ主体』と『アマチュア主体』の差異——全日本フォークジャンボリーを事例として」

編著者が冒頭で指摘するように、ポピュラー音楽を「『いま』ヒットしている」（7頁）はやりの音楽と捉えるむきには、一見して「それはポピュラー音楽と呼べるのか？」と素朴な違和を抱かせるようなテーマも含まれているかもしれない。しかし、各論考はいずれ

も古い事例から現在のポピュラー音楽にまで通底する諸問題をあぶり出し、ひいては副題にあるように日本文化そのものを捉えなおす契機となるような、きわめて広範な関心を惹起する知見を提示している。

これらの論考は、東谷氏がたずさわったシンポジウムとワークショップで発表された研究を改めて結晶化したものだ。第1～5章は、2012年から2014年にかけて東谷氏が主催した全3回にわたる成城大学グローバル研究センターの公開シンポジウム「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか」での口頭発表に基いており、ポーブ・輪島・周東・永原の各論は当ニューズレターの92号、遠藤論文は同96号に、それぞれ概要がまとめられている。また、安田・東谷の各論も2011年の本学会第23回大会で行われたワークショップ「ポピュラー音楽のローカルアイデンティティ」での研究発表の延長線上にあり、同91号と『ポピュラー音楽研究 Vol. 16』に詳細な報告がある。通常の論集書評であれば各論考ごとの論点を整理した上でそれぞれの批判を展開すべきだが、本稿では紙幅の制限上すでになされた概括との重複を避け、本書で扱われた歴史的諸問題が現代においていかなるアクチュアリティを持つのかを確認することにより、その意義を強調したい。

まず、本書の射程を俯瞰しておこう。主題とされている音楽の年代をもとに各論考を編年順に並べると、19世紀末から日本で受容された明清楽（ポーブ）、1920年代の童謡をはじめとする子どもに関する音楽（周東）、1929年に売り出されてレコード流行歌史の画期となった〈東京行進曲〉（永原）、1931年のパートン・クレイン〈酒がのみたい〉以後の外国語風の発音を用いた日本語歌謡＝カタコト歌謡（輪島）、1970年前後に岐阜県中津川で開催された全日本フォークジャンボリー（東谷）、1970年代初頭に萌芽がみられる京都ブルース（安田）、そして1992年に北海道で始まったYOSAKOI（遠藤）となり、全体でおよそ百年もの広がりがある。

本書の最大の魅力は、どの論考も考察の中心となる事例の時空間のみならず、きわめて野心的に他の地域や時代にまで議論を敷衍していることにある。例を挙げると、カタコト歌謡の展開を昭和初期から論じた輪島論文は、外国語の発音を用いた日本語での歌唱が、

キャロルやサザン・オールスターズなど1970年代以後のロック受容においても反復されたことを指摘している。カタコト歌謡的ロックは現在も一種の定番となっており、その一例として輪島論文の脚注では近年にお笑いの分野で知られている〈T-BOLANを知らない子どもたち〉と〈ジェットシー〉が紹介されている。両者はそれぞれT-BOLANとBLANKEY JET CITYを模して、「かつこよく」響きそうな英単語を日本語とチャンポンにし、いかにもアメリカかぶれなカタカナ英語の発音で歌ったものだ。ベタすぎる方法の過剰な踏襲が「ダサさ」に直結して笑いとなる事実は、それ自体、昭和初期から続くカタコト的な美学のもとに様式化された日本のロック特有の歌いまわしが、広くスタンダードなものとして共有されていることを示す。ふだん何気なくふれるようなお笑い文化のうちにも、ポピュラー音楽における多言語的な駆け引きの歴史が刻印されているのである。

また、周東論文ではメディアの変容のなかで絶えず再編される子どもの身体性や媒介性に着目し、日本の文化に深く根ざした「未熟さ」に価値をおく心性の歴史が検討される。「一九二〇年代の社会変動」と明記された題目を一見ただけでは分かりにくいのが、ここでは1910年代に設立された宝塚少女歌劇から2010年代のももいろクローバーZに至るまでの多種多様なポピュラー音楽文化が俎上に載せられ、時代ごとのメディア状況のなかでどのように「未熟さ」が立ち現れてきたのかが説得的に概括されている。この視座は、舌足らずな機械的発音（カタコトのヴァリエーションとも言える）を特徴とする初音ミクなどのボーカロイドや、役者の歌・踊り・演技などの拙さがかえって注目的となる『テニスの王子様』に代表されるマンガ原作つきの2.5次元ミュージカルなど、近ごろ領域横断的に学術的な関心を引きつつある新興のムーブメントを、より広く深い文化史的時間軸のなかに位置づける上でも有効であろう。

他にも、明治期から昭和初期までの中国エキゾチズムを論じたポーブ論文の論点は、その後の日本ポピュラー音楽史の中で何度もリバイバルしてきた中国風旋律を使った楽曲（近年ではきゅりーぱみゅぱみゅ〈キミに100パーセント〉などが代表例だろうか）の

考察にも援用可能であろう。いわゆる「クール・ジャパン」の近視眼的な日本文化礼賛に一石を投じた永原論文はポピュラー文化がもつインパクトを両義的にとらえる契機を与えてくれる。遠藤論文は、やや考証の厳密性に欠くものの、仏教の伝来にまで「ポピュラー」なうたとおどりの歴史をたどった大胆な構成で、現代の祝祭を論じている。また、安田論文と東谷論文はいずれも綿密な聞き取り調査にもとづいており、あらゆる音楽実践においてみられるプロとアマチュアのアイデンティティ（東谷）、音楽ジャンルが構成する多元的な空間性（安田）の問題を、臨場感のある当事者たちの証言をもとにして考察している。どのテーマも特定のジャンルにとどまらず、より広い「問い」へとつながる可能性を秘めている。

ひとつだけ欲を言えば、長い時間軸を設定した論集であるからこそ、ポピュラー音楽の歴史的研究における方法論の議論が必須であったように思う。特に、本書で最も古い事例を扱ったポーブ論文がYouTubeの音源を参照しているように、音源と映像のデジタル・アーカイヴが公的にも私的にも進んでいる昨今にあつては、過去のポピュラー音楽との相対的な距離感は急速に変化している。こうした新しい史資料をどのように研究に組み込んでいくべきなのは、慎重に検討されなければならない。

ともあれ、ひとたび本書をひもとき、各論考をたよりに今では忘れ去られつつある様々な音楽に耳を傾ければ、現在にまで連続と続く文化史の脈動がきこえてくることだろう。

（高橋聡太：東京芸術大学大学院）

会員のOUTPUT

デビッド・ホプキンス

Hopkins, David, "Kessen Musume: Women and Japan's Record Industry at War", *Harvard Asia Quarterly*, Fall/Winter 2013, Vol. XV, No 3/4, p. 26-37.

三井 徹

Mitsui, Tōru, ed. *Made in Japan: Studies in Popular Music*. New York and London: Routledge, 2014. Xv+254 pp. (ISBN 978-0-415-63757-2)

世界のPM研究者およびPMに関心のある読者に向けた最新日本PM研究論集で、企画から約3年を経た今年の6月末日に刊行。“Embracing the West and Creating a Blend”と題した序文に続いて第1部“Putting Japanese Popular Music in Perspective”で宮本直美（宝塚歌劇のスターとファン）、Shelley Brunt（紅白歌合戦）、東谷護（占領下のPM）、輪島裕介（新演歌の誕生）、三井徹（2拍子で歌われる3拍子曲）、第2部“Rockin’ Japan”で志水照匡（ロカビリー）、南田勝也（日本ロックの展開）、永井純一（ロック・フェスティバル）、第3部“Japanese Popular Music and Visual Arts”で小泉恭子（武満徹の反実験音楽）、葉口英子（アニメ『アキラ』）、山崎晶（歌う声優の出現）が執筆のあと、終章を毛利嘉孝（Jポップの国外受容）が担当。続いて山下達郎インタビュー、および日本PM研究文献選別一覧。

編著者の個人的文脈では、1983年以来、英語で発表してきた日本PM関係論考の流れの延長線上に位置する（英語での発表は、日本語とは比較にならない、圧倒的な数の潜在的読者を望める）。

東谷 護 編

『ポピュラー音楽から問う 日本文化再考』

（せりか書房、2014年10月）

ISBN：978-4-7967-0336-9

判型・ページ数：20cm/277, 16p

定価：3,000円(税抜)

今号p.3に書評を掲載しておりますので、ご参照ください。

◆information◆

理事会・委員会活動報告

■理事会

2014年第3回（持ち回り）理事会

2014年10月2日議題送付／10月16日回答締切

議題1 前回理事会議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 退会者の承認

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspmmpms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在するVol. 11までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております（ただし送料はご負担いただきます）。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方（非学会員の方でも結構です）は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていないVol. 12以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニューズレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1000字から3000字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。

いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニューズレターは 86 号 (2010 年 11 月発行) より学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回 (2 月、5 月、11 月) の刊行、紙面で年 1 回 (8 月) の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDF で発行されたニューズレターは JASPM ウェブサイトのニューズレターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

2013 年より、8 月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様に PDF により掲載しております。

次号 (103 号) は 2015 年 2 月発行予定です。原稿締切は 2014 年 1 月 20 日とします。また次々号 (104 号) は 2015 年 6 月発行予定です。原稿締切は 2015 年 5 月 20 日とします。

2011 年より、ニューズレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニューズレター担当 (nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニューズレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便または E メールでお知らせください。

現在、各種送付物などはヤマト運輸の「メール便」サービスを利用してお送りしております。このため、郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

4. お詫びと訂正

前号 (101 号) の会員動静欄において、原田会員のお名前に誤りがございました。以下のように訂正いたします。

(誤) 原田 悦幸 → (正) 原田 悦志

ご迷惑おかけいたしましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

JASPM NEWSLETTER 第 102 号

(vol. 26 no.4)

2014 年 11 月 18 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 粟谷佳司・大和田俊之・久野陽一・

鈴木慎一郎・谷口文和・増田聡・

南田勝也・毛利嘉孝・輪島裕介

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士